



モザイクタイルを広く知らしめる 拠点を作り、タイル産業を守る

多治見市モザイクタイルミュージアム館長 各務 寛治 氏

はじめに

人口減少を前提としたまちづくりである「地方創生」に、各自治体に取り組んでいる。あるところは歴史的に受け継がれた地域資源を活かし、あるところは専門家を招へいして斬新なアイデアを打ち出すなど、「正解のない課題」への対応に試行錯誤が続いている。

このような中、地域の活性化を目指す取り組みに果敢に挑戦している民間の方々がいる。本シリーズでは、そういった取り組みにスポットをあて、「正解のない課題」の解決に向けた糸口を紹介していきたい。

第2回は、地域の産業であるモザイクタイル^(注1)を広く知らしめる拠点を作り、タイル産業を守ろうと挑戦している民間企業の経営者の取り組みである。

① タイル産業を守る

(1) モザイクタイル発祥の地： 多治見市笠原町

多治見市の南東部にある笠原町(旧土岐郡笠原町)。全国に先駆けて、釉薬(ゆうやく=うわぐすり)を施した磁器質モザイクタイルを実用化し、今なお全国一の生産量を誇る。

笠原町でモザイクタイルの生産が始まったのは、1935年(昭和10年)ごろ。笠原町出身の山内逸三氏^(注2)が当時京都にあった国立陶磁器試験所で技術を学び、笠原町に帰ってからもさらに研究を続けて、実用化に成功した。山内氏は「地域のためになるのであれば」と、自身が開発した技術を地元の事業者にも惜しみなく伝えたことから、この技術が地域に広がり、国内最大の産地を形成した。

釉薬を施したモザイクタイルは、耐久性・耐水性が格段に上がり、また、より華やかな色合いが可能となったことから、戦後、風呂場やトイレ、洗面台などの水回り、外壁用の装飾タイルなどに

多く使われるようになった。さらに、輸出も盛んに行われ、モザイクタイルを含む陶磁器は、昭和40年代に自動車に取って代わられるまで、名古屋港における主要な輸出品目の一つであり続けた。

しかし、ライフスタイルの変化などでタイルを使用しない住宅が多くなったことや低価な輸入品が国内に流入した影響などにより、モザイクタイルの出荷額は下降が続いている^(注3)。

こうした状況を憂い、タイル産業を守るために立ち上がった人が、多治見市モザイクタイルミュージアム館長の各務寛治氏である。

(2) 強い危機感

今から20年以上前、各務館長は株式会社ヤマセの社長を務めていた(現在は会長)。笠原町のタイルメーカー等にタイルの原料を提供していたが、その量は年々減少していた。社業を通じて厳しい「現実」に直面していた各務館長は、笠原町のタイル産業の行く末に危機感を持ち始める。

一方、淘汰が進み町内の事業者が減少したことにより、残った事業者はある程度の受注量が確保できていたことから、各務館長は持っていた危機感を町内の事業者と「共有するこ



多治見市モザイクタイルミュージアム外観



多治見市モザイクタイルミュージアム
館長 各務 寛治 氏

とはできなかった」と語る。

事業者と危機感を共有できず、タイル生産量の減少に歯止めがかからない中、「『かつて笠原町ではタイル産業が盛んでした』と、歴史にその名前を刻むだけで終わらたくはない」と、各務館長の危機感は日増しに強くなっていた。

さらに強い危機感を抱いたのは、「1992年ごろ」（各務館長）。立ち会った住宅の解体現場で目にしたのは、建物とともに取り壊されたモザイクタイルの残骸。「取り壊されてしまうと、ただのゴミにしかならない」（各務館長）。「モザイクタイルは、意識して残さないと残らない」と、さらに強い危機感を抱いた各務館長は、「どうしたらタイル産業を守ることができるのか」を深

く思いつめる。タイル産業を守るためには、タイルがさまざまな場所で使われるようにならないといけない。これを実現するには、どうしたらいいのか。考え抜いた末に出した答えは、「一人でも多くの人に、モザイクタイルの魅力に気づいてもらうこと」だった。まずは、モザイクタイルを集めること、そして、集めたモザイクタイルを見せること。各務館長の収集活動は、主旨に賛同した当時の商工会産業振興部会のメンバーも加わって、このときから始まった。

(3) モザイクタイルを集める

一口にモザイクタイルといっても、さまざまな色や形、デザインなどがあり、その種類は無数にある。

「一人でも多くの人にモザイクタイルの魅力に気づいてもらうためには、一つでも多くのモザイクタイルを集めなければならない」（各務館長）。

モザイクタイルを提供してもらうため、サンプル品として、あるいは販促用の試供品として、モザイクタイルが倉庫に眠る地元メーカーや商社、これまでの暮らしの中で使われてきたタイルが残る個人の住宅などを1軒1軒訪ね歩いた。主旨を説明し、理解を得

るまで何度も足を運んだこともあった。当初は、こうした思いと行動が理解されず、奇異な目で見られることもあったが、「タイル産業を守るためには、モザイクタイルの収集は絶対に欠かせない」（各務館長）との信念はいささかも揺るがなかった。

強い危機感と熱い思いを基に続けられた収集活動は、やがて少しずつ認知され始め、モザイクタイルに関する「情報」が各務館長の元に入ってくるようになった。

さらに、「岐阜にモザイクタイルを集めている人がいる」として、各務館長の収集活動がマスコミにより紹介されると、全国各地からモザイクタイルの情報がもたらされるようになった。

強い危機感から始まった収集活動は20年以上続き、収集品は大小合わせて1万点を超える。

「『なにがなんでもタイル産業を守るんだ』という執念以外のなにものでもなかった」と幾多の困難を乗り越えて続けてきた収集活動を各務館長は振り返る。

この執念は、今なおまったく衰えていない。モザイクタイルの情報が入ると、「今でもすぐに現地へ行きますよ」と各務館長は笑いながら話す。



さまざまな色や形、デザインがあるモザイクタイル



(4) モザイクタイルを見せる

モザイクタイルの収集活動の進展に伴い、収集したモザイクタイルをどのように見せるのか、そして、その魅力をどのように発信していくのが新たな課題として浮上してきた。

ところが、各務館長の収集活動が全国的に認知されていたことにより、活路が開かれていく。「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」や「熊本県立農業大学校学生寮」などで受賞歴のある建築史家・建築家藤森照信氏との出会いである。全国各地で近代建築の調査・研究にあたり、「昭和のもの」を残す活動をしている藤森氏は、各務館長の思いと行動に大いに共感し、モザイクタイルの魅力を発信する施設のデザイン・設計を引き受けたのである。

藤森氏の示した施設の外観は、タイルの原料を掘り出す粘土山をモチーフにした独創的なもので、一度見たら忘れられないような形であった。タイルの魅力を発信する施設というと、「タイル張りの四角い建物を想像していた方も多かったのではないか」（各務館長）と思われるが、しかし、それは想像をはるかに超える、というよりも、想像すらできないものだった。そのため、施設の全容を初めて見たときの

地元住民の驚いた顔は、「今でも忘られない」（各務館長）。

モザイクタイルの魅力を発信するという施設内の機能に加え、なんとも言えない懐かしさの中に、タイルの魅力を訴えかけるという、施設そのものの魅力が加わり、「おかげさまで、オープン前から注目を集めていた」と各務館長は語る。

また、こうした施設を整備する際には、費用の工面も大きな課題となる。これについても各務館長は「タイミングが良かった」と振り返る。このころは、市町村合併が推進されており、多治見市との合併が進展する中、笠原町と各務館長は連携して、「タイル産業を守るためには拠点施設が必要」とさまざまな場面で多治見市に訴え続けたという。その結果、「拠点施設の整備」は新多治見市のプロジェクトの一つとして取り上げられた。

(5) 新たな活動

一方、各務館長の執念の活動は、周囲に新たな活動を生んでいた。

地元の主婦を中心とした女性有志グループが、町内の殺風景なゴミステーションをモザイクタイルで装飾する活動を始めた。今ではおよそ20か

所のゴミステーションがモザイクタイルで飾られている。こうした取り組みが、また別のグループにも広がるなど、地域の中でモザイクタイルを再評価しようとする動きが広がっている。

各務館長は、「モザイクタイルの魅力に改めて気づくことにより、『笠原町はモザイクタイルのまち』という誇りを地域の方々が取り戻しつつあることが何よりうれしい」と語る。

② 多治見市モザイクタイルミュージアム

「タイル産業を守る」という各務館長の長年の思いが結実した施設が、2016年（平成28年）6月にオープンした「多治見市モザイクタイルミュージアム」（以下、ミュージアム）である。

(1) モザイクタイルの魅力を発信する

館内には、「自信をもって見せられるモザイクタイル」（各務館長）が展示されている。ただし、そのようなものであっても、鑑賞するだけでは、来館者の印象に残りにくい。そこで、モザイクタイルを使ってオリジナルの小物を作ることができる体験工房を充実させた。見る



女性有志が1枚1枚モザイクタイルを貼って作り上げたゴミステーション



家族連れや女性グループなどで賑わう体験工房

だけにとどまらず、体験できることにより、大人も子供も楽しめるようになっている。

こうした取り組みが奏功し、来館者数は当初の目標であった年間2.5万人をはるかに上回り、オープンから2年足らずで30万人を超える見込みだという。

『『何度来ても楽しめるミュージアム』として認知されることにより、リピーターが着実に増えてきた』と、各務館長は手応えを感じている。

(2) タイル産業の振興につなげる

ミュージアムでは、モザイクタイルの魅力をタイル産業の振興につなげるための取り組みにも力を入れている。

タイルの魅力に気づき、自宅にタイルを取り入れてみたいという人を対象に、インテリアデザイナーとの個別相談会を毎週土曜日に開催している。インテリアデザイナーとじっくり相談できるように、各日3組限定となっている。

また、館内には、地元のタイル事業者が取り扱うモザイクタイルのサンプルが展示され、事業者と来館者との商談の場が設けられている。ここにはタイルの専門家が常駐しており、来館者からのさまざまな相談に対応し、相談内容に応じて事業者を紹介している。

さらに、地元のタイル事業者と住宅デザイナーや建築家などが意見交換できる場を設けており、事業者が新商品の開発や販路開拓につなげるきっかけを作っている。

ミュージアムを拠点とした、地元事業者と連携した活動について、各務館長は「従来の考え方にとらわれない、新しい発想へと意識を変えてほしい」と期待を寄せている。

(3) 販わいの創出へ

ミュージアムがたいへん多くの人々にモザイクタイルの魅力発信を成功したことにより、その周辺では、想定外の「効果」が生まれている。

ミュージアムに隣接する公民館内の空きスペースには、モザイクタイルで店内を飾ったカフェ、さらに、ミュージアム前の通り沿いにあった空き店舗には、モザイクタイルや地元陶芸家の作品などを扱う雑貨店がそれぞれオープンした。ミュージアムの「集客力」に着目した、地元の事業者や有志がさらなる魅力の発信やまちの賑わいの創出にチャレンジしている。

各務館長が思い描く地方創生は、「地域の人々がわがまちに誇りを取り戻すこと」である。多治見市笠原町で

は、地域の産業を広く知らしめる拠点を作り、地域への誇りを取り戻しつつある。最初はたった一人の民間企業の経営者が、「残さないと残らない」というモザイクタイルの宿命に危機感を抱き、「タイルを集める」という地道な活動を賛同する仲間とともに始めた。こうした思いと行動が共感を呼び、タイルの魅力を多くの人々に発信することに成功した。また、周りの人を刺激して新たな活動へと促し、さらに、それは賑わいの創出を目指す活動まで広がった。

地域の産業に誇りを持つことをきっかけに、自分たちの地域への誇りを取り戻す。わが国最大のモザイクタイル生産地である多治見市笠原町に、地方創生の一つの解を見た。

(注1)モザイクタイルとは、1枚の表面積が50平方センチメートル以下の小型の磁器質タイル。

(注2)山内逸三(1908-92)。ミュージアムでは、施釉磁器質モザイクタイルを広めた先駆者として紹介されている。

(注3)経済産業省「工業統計調査『品目編』(4人以上事業所)」によると、岐阜県におけるモザイクタイルの「製造品出荷額等」は、平成3年(ピーク時)の29,279百万円から、平成26年の13,597百万円へと2分の1以下に減少している。

(2018.1.31取材)

OKB総研 調査部 高木 誠



各事業者のサンプル品を展示したコーナー



来館者の相談に応じるタイル専門家